

〈自閉症・情緒障害教育〉

コミュニケーション能力の育成のための授業づくり

—言語活動を取り入れた実践を通して—

宜野湾市立宜野湾小学校教諭 新 屋 和 樹

I テーマ設定の理由

文部科学省コミュニケーション教育推進会議経過報告（平成23年）において「21世紀を生きる子どもたちは、積極的な『開かれた個』（自己を確立しつつ、他者を受容し、多様な価値観を持つ人々と共に思考し、協力・協働しながら課題を解決し、新たな価値を生みだしながら社会に貢献することができる個人）であることが求められる。」と述べられている。また、小学校学習指導要領解説総則編第1節1（1）改定の経緯でも「学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。」とあり、これからの社会を担っていく児童らには、自分の思いを持ち他者の思いを認め、協力・協働しながら課題を解決しようとする態度の育成は必要であると考えられる。そのためにも、新学習指導要領でも掲げられているように、「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善に取り組むことが必要である。

本研究では、宜野湾市立宜野湾小学校自閉症・情緒障害特別支援学級（以下「特別支援学級」とする）の4年生4名を研究の対象とする。対象児童の実態としては、コミュニケーション場面において、自分の気持ちや思いを言えなかったり、時系列で伝えることができないなど、言語表現力に課題がある。また、協力学級での学習においても、自分の意見を文章で書いたり発表したり、友達の考えと比べるなどの活動ができていない現状や、集団活動への参加は可能であるものの、自分の気持ちや伝えたいことをうまく相手に伝えることが苦手なため、誤解がもとで友達とぶつかったり、活動に最後まで参加できないなどの課題が見られる。このような児童の様子から、自己肯定感が低く、自信を持って学習に参加する事ができない状況であると推測する。この事より、児童が自分の考えを持ち、自信を持って伝えたり、他者の考えを受け入れたりする等のコミュニケーション能力が身につくような授業実践や授業改善が必要であると考えた。

そこで、本研究では、子供の発達段階に応じた読書教育の推進のために取り組まれてきた「アニメーション」の手法を取り入れ国語科の実践と授業改善を行う。また、学習の下支えとなる自己統制力や集団活動に必要な社会性の向上のために、自立活動において「ソーシャルスキルトレーニング」（以下、「SST」とする）を取り入れる。これらの授業づくりを通して、コミュニケーションの育成につなげたいと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

- 1 国語科や自立活動の時間において「アニメーション」の手法や「ソーシャルスキルトレーニング」を取り入れることで、言語活動が充実しコミュニケーション能力が育つであろう。
- 2 意見交流の場において、自分の考えをまとめたワークシートをもとに、自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたり比較することで、言語活動が活発になりコミュニケーション能力が育つであろう。

II 研究内容

1 コミュニケーション能力

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（2018）では、「コミュニケーションとは、

人間が意思や感情などを相互に伝え合うことであり、その基礎的能力として、相手に伝えようとする内容を広げ、伝えるための手段をはぐくんでいくこと」また「コミュニケーションを円滑に行うためには、伝えようとする側と受け取る側との人間関係や、そのときの状況を的確に把握することが重要であることから、場や相手の状況に応じて、主体的にコミュニケーションを展開できるようにすることを意味している」と記されている。本学級の実態においては、自分の考えや意見を伝えることが苦手な児童が多く、何も言わずに自分の思いで行動し注意をうける児童や支援員の手を借りて自分の意見を伝えてもらっている児童など、コミュニケーションの課題は大きいと感じる。自分自身の考えを話す事や、相手の考えを聞く事で双方向の会話を充実させたり、発表の場を工夫することで、コミュニケーション能力の育成を図っていく。

2 言語活動

言語活動の充実に関する指導事例集第2章言語の役割を踏まえた言語活動の充実において「平成20年答申において、言語は知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤であるとされている。このため、各教科等において言語活動を充実する際には、このような言語の果たす役割を踏まえた指導を行うことが大切である。」と述べられている。また、言語の役割を踏まえた言語活動の指導について以下のように示されている。

知的活動（論理や思考）

○事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること

○事実等を解釈するとともに、考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること

コミュニケーションや感性・情緒

○コミュニケーションは、人々の共同生活を豊かなものにするため、個々人が他者との対話を通して考えを明確にし、自己を表現し、他者を理解するなど互いの存在についての理解を深め、尊重していくようにすること

○感性や情緒を育み、人間関係が豊かなものとなるよう、体験したことや事象との関わり、人間関係、所属する文化の中で感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を交流したりすること

以上のことより本研究における言語活動は、児童の発達の段階や言語能力を踏まえて「理解し合う」「伝え合う」「表現する」「交流する」といった活動と捉え取り組んでいく。

3 アニマシオン

アニマシオンとは、スペインのジャーナリストであるマリア・モンセラット・サルトが、子どもたちに読書の楽しさを伝えるとともに読む力を引き出すために1970年代から開発した、グループ参加型の読書指導メソッドである。岩辺泰史(1999)は「アニマシオンとはアニマ（anima, ラテン語）＝魂・生命が生き生きと躍動することです。（中略）少しずつ異なるたくさんの絵や人形を連動させて動かしたときに、あたかも生きてるように見える様子を言っています。（中略）。本はながめただけでは『死んだ』活字の集合体です。しかし、それを読み始めたときに、そこは『物語の世界』が生き生きと浮かび上がります。」と表現している。つまり、生命なきものに生命が吹き込まれるようなイメージである。アニマシオンには75種類にまとめられた『作戦』と呼ばれる様々なプログラムがある。例えば、物語や詩の中にわざと間違いを入れて読み聞かせを行い、間違いを探させたり、あらすじをクイズにして出題する等のゲーム的な要素を取り入れ、深く読む習慣を身につける。アニマシオンは『読む力』や『思考力・想像力』を身に付けたり言葉の意味を理解し、自分なりに考え判断し、表現することが容易になると言われている。

本学級でも本を読むことが好きな児童は多い。しかし、内容を十分に理解している児童は少ない。本研究ではアニマシオンの手法をいくつか取り入れ、自発的な発言を促したり、自分の考えを書いたり発表したりする場をできるだけ多く設定する。

4 自立活動

自立活動とは特別支援学校の教育課程において特別に設けられていた指導領域である。自立活動は、授業時間を特設して行う自立活動の時間における指導を中心とし、各教科等の指導においても、自立活動の指導と密接な関連を図って行われなければならない。特別支援学級に係る教育

課程については、学校教育法施行規則第 138 条に「特に必要がある場合は、（中略）特別の教育課程によることができる」と規定されている。また、小学校学習指導要領解説総則編（平成 29 年 3 月告示）には、特別支援学級における特別の教育課程には「障害による学習上または生活上の困難を克服し自立を図るため特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第 7 章に示す自立活動を取り入れること。」と示されている。自立活動の内容には、6 区分（「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」及び「コミュニケーション」）27 項目の指導内容が示されているが、各教科等の指導とは異なり、個々の児童の障害による課題に応じて指導内容を選定し、指導していく。

本研究においては、心理的な安定の「（2）状況の理解と変化への対応に関すること」、人間関係の形成の「（3）自己の理解と行動の調整に関すること」、コミュニケーションの「（2）言語の受容と表出に関すること」、「（5）状況に応じたコミュニケーションに関すること」の内容を取り入れ、自立活動を計画する。

5 ソーシャルスキルトレーニング（SST）

SSTとは、集団行動をとったり、人間関係を構築したりするうえで必要な技能を身につけるための訓練である。

ソーシャルスキルは、学校生活や家庭における大人との関係の中で、また、児童同士の関係の中で育っていくものである。しかし、発達面にアンバランスさのある児童らは、それらのスキルを習得するのになんらかの困難さを抱えており、学校や家庭等の社会生活を過ごすだけでは適切な対人関係を築くことが難しい。本学級でも当該年齢で習得できているようなスキルが身につけていない児童や対人関係に課題がある児童、何度も失敗を繰り返してしまう児童等がいる。その課題を解決するため、一人一人の特性に応じた対処法が身につけられるよう SSTを取り入れた授業を計画し、コミュニケーション能力の育成を図りたい。

Ⅲ 指導の実際

1 児童の実態

本研究の対象である 4 名の児童は、睡眠の状態や天候、苦手な教科がある等が原因で、情緒の安定が乱れる傾向があるため、保護者との連携や朝の会での健康観察が欠かせない。表 1 は、それぞれの児童のコミュニケーションの実態と短期目標である。本学級の子どもたちは、特定の友達と仲良く遊ぶ事や手助けする事はできる。一方、「他者の気持ちを考えず発言する」「場に応じた発言や態度ができていない」「自分の意見に自信が持てず積極的に発言できない」等の課題がある。そのため、自分の意見と違う意見が出ると、怒ってしまう場面がみられたり、なかなか発表できない子を焦らせたりする場面がある。「場に応じた発言や発表」「他者からの意見を参考にしながら自分の意見をまとめていく事」「自信を持って発表できる事」等、個々の児童の目標達成を目指す。

表 1 対象児 4 名のコミュニケーションの実態と学習の短期目標

児童	コミュニケーションの実態	短期目標
A 児	・他人の指摘はするが、自分が言われると怒る ・調子に乗るとつぶやきも発表も多くなる ・休み時間に友達を誘う「遊びたい」が言えない	・場に応じた発言や発表ができるようにする ・自分の考えを書いて、発表する場を増やし、多くの発言ができるようにする
B 児	・感想を書いたり発表はよくできる ・場に応じた発言や態度が身についている ・自分の話を聞いてくれないと怒る	・他者の意見を参考にし、自分の意見をまとめることができる ・周りの児童の発言も聞くことができる
C 児	・発言や発表はできるが、自信がない ・支援員に自分の事を代弁してもらう	・堂々と発言できるようにする ・自分の言葉で担任に伝える事ができるようにする
D 児	・自分の考えを持つことができるが、発表する事に時間がかかる ・急な変更が苦手な怒ってしまう	・思った事や考えた事を伝える事ができる ・自分で判断せずに、友達や周りの人に聞いてから行動する

2 N I N O 教研式認知能力検査による実態把握

N I N O 教研式認知能力検査は、学び取った各教科の学力ではなく、学習を進めるうえで必要とされる「認知能力」を把握し、授業や学習の改善、そして学力の向上に役立てるための検査である。この検査では、コミュニケーションの育成に関連する「思考力、記憶力、言語能力」の3項目を中心に対象児4名の状況を見ていく(図1)。また、I S S - C とは、生活年齢を加味した認知能力偏差値の事であり、全国平均値は50である。

A児は、3つの認知能力の中では、思考力は比較的高く、推理を働かせて問題を解決する力があることがわかる。書く事が好きなので自分の考えなどを文でまとめることにつなげ、場に応じた発言や発表ができるようにする。I S S - C の値は40である。

B児は、3項目とも比較的高い。日頃から自分の考えを文にまとめる事はできている事から、児童同士の発表へとつなげ、コミュニケーション力をさらに伸ばしたい。I S S - C の値は53である。

C児は、言語能力、記憶力が比較的高い値になっている。日記や絵作文を書くことが好きである。しかし、自信のなさから自分から手を挙げて発表したりする場面は少ない。自信を持って自分の意見が言えるよう、手立てや場の設定の工夫を行う。I S S - C の値は42である。

D児は、思考力が低く、自分の考えをまとめ、発言するまでに時間がかかる傾向にある。自信を持って発言ができるようにするためにも、本児の実態に合わせた手立てや、発表の場の工夫が必要だと考える。I S S - C の値は33である。

図1の結果より、学級全体においては、I S S - C の値に幅があり、コミュニケーションに必要な思考力や言語能力にもばらつきがみられる。対象児4名ともに、語彙や文の構成など日々の日常生活に必要な能力がまだ不十分であることがこの結果からも分かる。そこで、国語ではアニメーション、自立活動ではソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、課題に取り組んでいく。

3 授業の実践① 本時の学習 12/13 (国語科)

(1) 本時までの取り組み

「ごんぎつね」の学習では、アニメーションの手法「前かな?後ろかな?」「ダウトをさがせ」「ぼくのタイトル世界一」を取り入れ、児童の実態に応じて作戦をアレンジし、学習を進めてきた。

「前かな?後ろかな?」は、挿絵や要約文をカードで提示し、物語の順序を考える作戦である。この作戦では、一回だけの朗読で、登場人物や場面の様子などを思い出し、自分たちで話し合っ

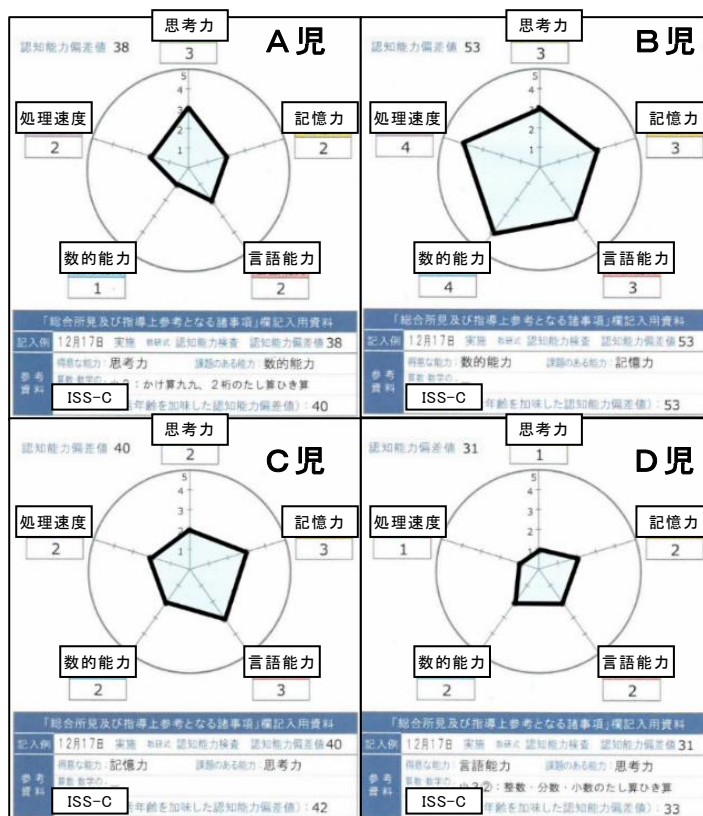


図1 N I N O 認知能力検査の結果

悩みながらもお互いの考えを出し合い、意見をまとめて挿絵に合う要約文を選ぶことができた。

「ダウトをさがせ」は、物語の内容をわざと間違えて読み聞かせた上で、児童らに間違いを探させる作戦である。この作戦では、児童らは集中して物語を聞くことができ、間違いに気づいた時には、積極的に手を挙げる姿が見られた。指名された児童は、とても楽しそうに自分の考えを発表することができ、どの児童も意欲的に参加していた。本時では、「ぼくのタイトル世界一」を参考に、児童の実態に合わせ「ごんぎつね」のお話の良さを短い言葉で表現する学習に取り組んだ。

(2) 本時の目標

- ① 心に残った場面を具体的に説明できる。
- ② 「ごんぎつね」の物語の良さを伝える場で、自分の考えを発表したり、友だちの意見を聞いたり、取り入れたりできる。

(3) 授業仮説

- ① 心に残った場面を説明する場において、これまで使ってきた挿絵を選び、登場人物の性格や気持ちなどの変化に着目することができれば、理由を具体的に説明できるであろう。
- ② 「ごんぎつね」の物語の良さを伝える場において、ワークシートで自分の考えをまとめることで、自分の考えを伝えたり、相手の意見を聞いたり、取り入れたりすることができるであろう。

(4) 本時の展開

過程	学習活動 ■言語活動○主な発問	☆予想される児童の反応	・指導上の留意点○評価
導入	1 黙想（あいさつ） 2 今日の学習のめあてを確認する 3 今日の学習の流れを説明する 4 ■「ごんぎつね」の中で心に残った場面を選び、理由を説明する 5 めあての確認をする	☆今日の学習はなんだろう ☆「こんなことやるんだ」 学習の流れを確認できた。 ☆挿絵を使って心に残った場面を発表するのだな。 ☆今日のめあては○○だ	○意欲的に学習に取り組んでいるか（関心・意欲）  心に残った場面を選び説明する
○『ごんぎつね』のお話のよさが伝わるように「ごんぎつね」を短い言葉でまとめてみましょう。			
展開	6 ■『ごんぎつね』のお話のよさが伝わるように「ごんぎつね」を短い言葉でまとめる 7 短い言葉でまとめ、自分の考えを書く		○気に入った場面に線が引き、自分の言葉で説明できる。（記述・発表） ・わからない児童へはヒントを出す ○自分の考えを発表することができる（発表）  五・七・五形式で書く
終末	8 今日の学習の振り返りを行う 9 次時のことを伝える	「ごんぎつね」を短い言葉で伝えよう	

(5) 本時の評価規準

話す・聞く能力	イ 自分の選んだ場面の理由を挙げながら自分の考えを話したり、自分と友達の考えを比べながら聞いたりしている。【「A話すこと・聞くこと」②内容(1)イ オ】
書く能力	ウ 読み深めたことを基に、「ごんぎつね」を短く紹介する文が書けている。【「B書くこと」②内容(1)ア】
読む能力	オ 読み取った内容について、自分の考えをまとめ、一人一人の考え方に違いがあることに気付いている。【「C読むこと」②内容(1)オ】

(6) 授業仮説の検証

① 授業仮説①の検証

本時では、これまで使ってきた挿絵から、心に残った場面を選び、その理由を友達に説明する場を設定した。D児は「ウナギや栗などを毎回運んでいく場面」を選んでおり、いたずらを後悔するごんの姿に共感し、心優しいごんの行動を読み取る事ができていた。A児もいたずらの場面と食べ物を運んでいく場面に心を動かされたようで、「兵十は、ぼく（ごん）

と同じ一人ぼっちでさみしそうだなー」と書いていた。その他の児童も、どのような表現をすれば自分の気持ちが友達に伝わるのかを考える姿が見られた。

② 授業仮説②の検証

「ごんぎつね」の物語の良さを短い言葉でまとめる場面において、これまでの挿絵や物語全体を通して気になった場面を手がかりに、各自で考えをまとめる時間を設定した。「ごんぎつね」の物語の良さを一人でまとめることができるB児は、ワークシートに「ごんぎつね いたずら好きな 優しいよ」と、短い文にまとめることができた。また、振り返りでは、「やんちゃなごんでも、失敗を繰り返すだけではなく、後悔して次の行動につなげる姿に驚いた。」と感想を述べた。どのようにまとめたら良いか分からず考えこんでいるC児には、以前学習した五・七・五の形式で表現する方法や言葉を整理し自分の考えをまとめられるようなヒントを出す事で、「やさしいな ごんも兵十も あたたかい」とまとめることができた。D児は、ごんがうなぎを罠から逃がしてしまったため、兵十がおっかあにうなぎを食べさせてあげられなかったことを後悔していることを理解し、ごんは悪いやつではないと考える事ができた。そして、交流の場では、ごんの立場に立って「おっかあに うなぎを 食わせてあげたいな」と発表することができた。この発表を聞き、B児から「食わせるというより、食べさせてにしたら。」とアドバイスを受け、D児は、B児の意見を取り入れることができた。

(7) 考察

本單元では、アニメーションの作戦である「前かな？後ろかな？」「ダウトをさがせ」「ぼくのタイトル世界一」等を取り入れゲーム感覚で学習を進める事で、登場人物の心情や情景描写について考え、内容を理解することができた。

本時では、物語の「心に残った場面」や「良さ」を伝える場面において、自分の考えを友達に伝えるためには、どのような表現をしたら良いかと考え、具体的に説明することができた。また、「ごんぎつね」の物語の良さを五・七・五の形式にまとめ発表できた。意見交流の場では、お互いの考えの良さに気づいたり、よりよい表現に書き換えて、修正したりする姿も見られた。

4 授業の実践② 本時の学習 10／10（自立活動）

(1) 本時までの取り組み

自立活動の時間には、ワークシートを活用して「その場に応じた言葉遣い」、「学級・学校でのルールやマナー」、「相手の立場を考えて行動する」等について取り組んできた。相手の立場を考えて行動する学習では、カードゲームを実際に体験し、勝った時の気持ちや負けたときの気持ちについて考えた。自分が勝った時、負けた人にどのような声かけをするのか考え、ロールプレイで実演した。この学習の振り返りでは、「勝った時はうれしいが、負けても相手のことを考えて、100%喜ばずに、心の中で叫ぶ」とA児が発言した。この発言を受け「勝った人が、負けた人のことを考えてくれていることが分かると、負けてもくやしい気持ちを抑えることができる」とD児が自分の気持ちを話す場面も見られた。相手の立場を考える学習を中心に取り組んできた事で、相手を意識した行動が徐々にできつつある。しかし友だちとトラブルになった時やイライラが抑えきれない時の行動にまだ課題が残る。そこで、怒った時の自分の気持ちの抑え方や相手に迷惑をかけない方法を全体で考える事で、自分に合った怒りの抑え方を増やすことができると考える。以上の事より、本時では「怒りの表出」について取り組んだ。

(2) 本時の目標

- ① 「怒りの表出のさせ方」がわかる。
- ② 「怒り」を抑える自分なりの方法を見つけることができる。

(3) 授業仮説

怒りの抑え方について、自分の意見を発表したり、友だちの意見を聞く活動を通して、自分に合った怒りの抑え方について増やす事ができるであろう。

(4) 本時の展開

過程	学習活動	☆予想される児童の反応	・指導上の留意点 ○評価
導入	1 あいさつ（黙想） 2 本時の流れを確認する 3 本時のめあてを確認する	☆元気にあいさつする ☆今日は「怒り」について学習をするのだな	・学習の流れや活動内容、めあてを掲示する ・積極的に発言できない児童にも、意図的に指名し発言を促す
展開	4 あおぞら学級の怒りの表出について振り返ろう 5 自分の考えをワークシートに書き意見を出し合う	☆分かったぞ！ ☆自分の考えは正しいかもしれないな ☆ワークシートに書く	・自分の考えを書く ・友だちの考えを聞く ○観察 ○発表
終末	6 今日のまとめを行う 7 振り返りを行う	☆自分の考えをまとめる ☆発表したい！	・意見を取り上げまとめに使う ・振り返りの時間を設ける

(5) 本時の評価規準

児童	児童の実態	具体的な個人目標（評価規準）
A児	・怒りを感じた時の気持ちの切り替えに時間がかかる	・怒りを感じた時に、自分に合った気持ちの切り替え方を見つける事ができる
B児	・自分の話を聞いてもらえないと怒る	・自分の立場を考えて怒りの感情をコントロールできる。
C児	・怒っている感情を表出できず、泣いてしまう	・怒っている時の自分の気持ちを、言葉で伝えられる
D児	・イライラすると落ち着くまでに時間がかかる	・怒りを感じた時に、自分に合った気持ちの切り替え方を見つける事ができる

(6) 授業仮説の検証

本時では、イライラを物や人にぶつけると、相手をケガさせたり、物を壊してしまったりすることがあると知ると、「どうしたら相手を傷つけないで怒りを表出することができるのか」を考え始めた。怒りの表出が多いA児は、「好きな絵を描いたり本を読んだりして怒っていることを忘れる」と自分なりの怒りの抑え方をワークシートに書くことができた。また、B児は「怒ってしまった後に相手の意見も聞いて、意見の違いを認め合う」と書くことができた。お互いの怒りの抑え方を話す場を設定する事で、自分の方法を話したり友だちの方法を聞く事ができ、怒りの抑え方にもいろいろな方法がある事を知る事ができた。授業の振り返りでは、「怒りの抑え方が分かったので、そういう場面がきたら思い出してやりたい。」「けんかの場面では、自分の事だけではなく相手の意見も聞くことが大切だと思うので、聞いてみたい」と振り返る事ができた。

(7) 考察

本時の「怒りの表出」は、身近な話題のため、興味を持って最後まで真剣に考えることができた。怒りの抑え方を共有する事で友だちの方法を知り、「怒りを感じた時には思い出してやりたい」「相手の意見を聞く事が大切だと思う」などの振り返りも出た。A児は「好きな絵を描いたり、本を読んで怒っている事を忘れる」方法を知ることによって、以前よりも早く落ち着く事ができるようになった。また、B児も「相手の意見も聞く」必要性を感じ、友だちの意見を聞く事ができるようになっている。

5 授業の実践③

(1) 特別支援学級合同授業と交流学級での様子

宜野湾市立宜野湾小学校（以下、本校とする）特別支援学級では、自閉症・情緒障害特別支援学級と知的障害学級の4年生から6年生を一つの集団として、月一回合同で道徳の授業（以下、合同授業とする）を行っている。本特別支援学級だけでなく、他の特別支援学級においても、コミュニケーション能力に課題があり、この課題の取り組みの一つとして合同授業に取り組んでいる。

① 合同授業での様子

対象児4名は、学年当初は、自分の考えや思いをうまく伝えることができなかった。学び

合いを取り入れた合同授業を経験していく中で、同級生や先輩と交流し、「答えが一つではない」と言うことに気づき、「自分の考えが人と違って大丈夫」と分かるようになると、自信を持って自分の意見や考えを発言できるようになってきた(図2)。友達の見聞を聞いたりするのが苦手だったA児も、少しずつ友達の話に耳を傾けられるようになってきた。

② 交流学級での様子

交流学級での道徳や特別活動の時間のペアやグループ、全体で考える場面においては、対象児童が積極的に挙手や発言する様子はあまり見られない。しかし、授業の様子を撮影したビデオから挙手や発言回数を調べたところ、11月に比べると1月の授業では、若干ではあるが全体的に伸びが見られる(図3)。これまで関心がなければ話し合いに参加する事が難しかったA児も、みんなの発言に耳を傾け、興味を持って聞こうとする態度が見られるようになった。

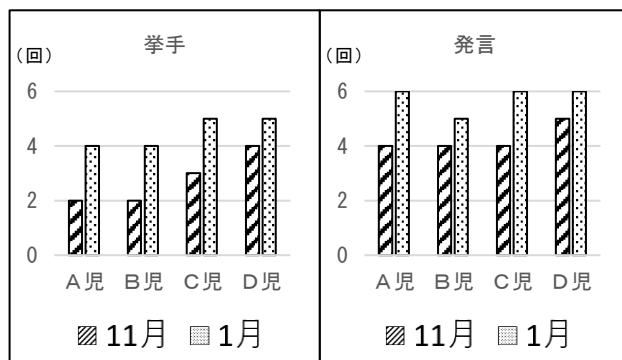


図2 支援学級での挙手と発言の変化

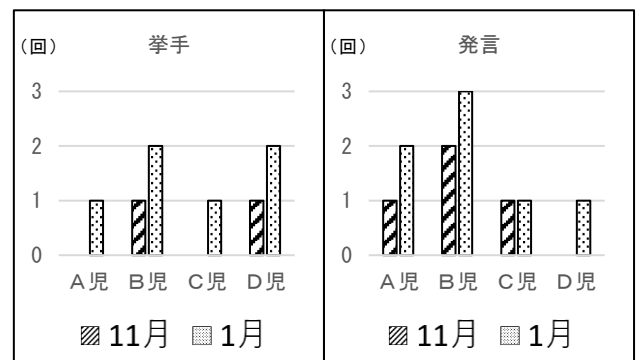


図3 交流学級での挙手と発言の変化

(2) 考察

月1回行っている合同授業でも4月当初に比べると児童が学び合いを通して他学年と関わり、教え合い、学び合う中で気軽に会話できるようになり、質問したり自分の考えを発表したりする様子が多く見られるようになった。これまでは、あまり一緒に遊ぶ事がなかったA児やC児も、休み時間に仲良くゲームしたり、声をかけあって遊び方を工夫する様子が見られた。また、図2から分かるように、支援学級では、全員が挙手や発言の回数に伸びがみられる。交流学級では、まだ積極的に手を挙げて発言する場面は少ないものの、挙手の回数や発言の回数が増えている(図3)。B児は交流学級でも毎回挙手するように心がけていると話しており、児童が自分の課題を意識している事が伺える。児童一人一人が自分の課題を意識し、克服しようとする意欲につながっているのではないかと考える。

6 アンケート調査結果

(1) 児童へのアンケート

11月と1月に国語に関するアンケートを実施した。「友達の発表や考えを聞くことが好きですか」という質問では、好きと答えた児童が検証後は2名から3名になり、友だちの話に耳を傾け、いろいろな考えを聞くことに肯定的になってきている(図4)。「日記や作文など自分の考えを書く事は好きですか」という質問では、「あまり好きではない」と答えた児童が1人いる(図5)。A児は、考えてすぐに答えが出る課題には積極的に取り組んでいるが、文章問題や作文など時間のかかる課題は、消極的である。粘り強く取り組まなければならない課題に対して抵抗を感じているからだと考える。「自分の考えをみんなの前で伝えたり、話したりする事

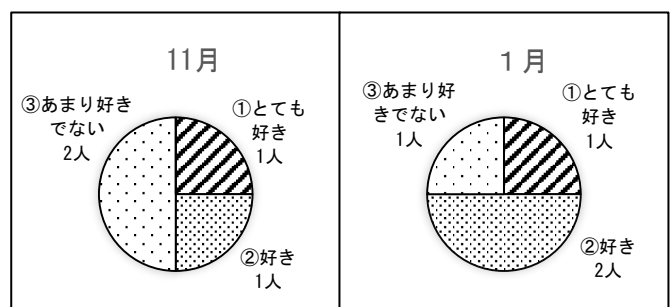


図4 友達の発表や考えを聞く事は好きですか

は好きですか」という質問では、11月と1月の結果に変化は見られず、発表することもあまり好きではないという児童が半分となっている（図6）。しかし、交流学級担任の1月のアンケート結果からは「児童らは、発表できている」と回答している。児童のアンケートや振り返りの結果から、児童は自信が持てないまま発表しているのではないかと推測する。これを受け、少しでも発表の苦手意識が和らぐような学習形態の工夫や授業改善を今後も継続して行っていく必要がある。

(2) 交流学級担任アンケート

11月と1月に交流学級での対象児の様子についてのアンケートを実施した（表2）。

表2の②の質問に対し、1月にはC児とD児の2名は特に清掃のチェック係りとして清掃活動に積極的に参加していると報告があった。清掃分担区を回り、友達への声かけやアドバイスも行っており、コミュニケーションも多くなったという内容だった。表2の③では、友達の考えを聞くことが苦手だったD児が、聞く時に相手に体を向けて聞く事で、相手のメッセージを受けとめられるようになった。自分以外の人の意見を聞くことの大切さを感じたのだと1月のアンケートの記述から知ることができた。表2の④の質問では、発表の機会がないというクラスが多くあった。交流学級の担任によると、一斉授業では、自分の考えや意見がなかなか伝わらない事も多く、発表する機会がないという状況にあると報告があった。この状況から、対象児童は交流学級担任の発問が十分に理解できず、挙手や発言ができないのではないかと考える。自分が困った時の対処法を、自立活動で取り組む必要があると考える。表2の⑤の質問では、絵作文など簡単に終わられるものはできているが、作文など長い文章を書くことはできていない。この結果から児童の実態に合わせた作文指導の計画を立て、指導していく必要がある。

7 研究仮説の検証

(1) 研究仮説①

国語科や自立活動の時間において「アニメーション」の手法や「ソーシャルスキルトレーニング」を取り入れることで、言語活動が充実しコミュニケーション能力が育つであろう

国語では、毎時間のねらいを達成するために、アニメーションの 作戦「前かな？後ろかな？」「ダウトをさがせ」「ぼくのタイトル世界」等を取り入れ、効果的に

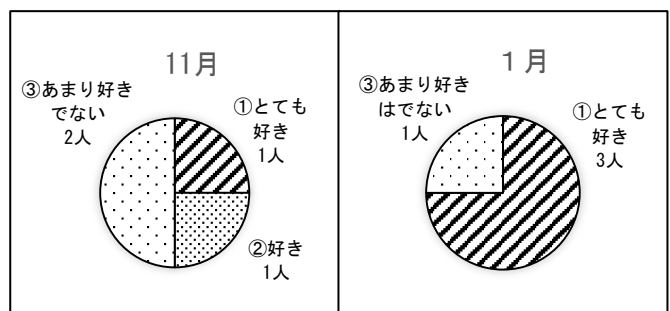


図5 日記や作文など自分の考えを書く事は好きですか

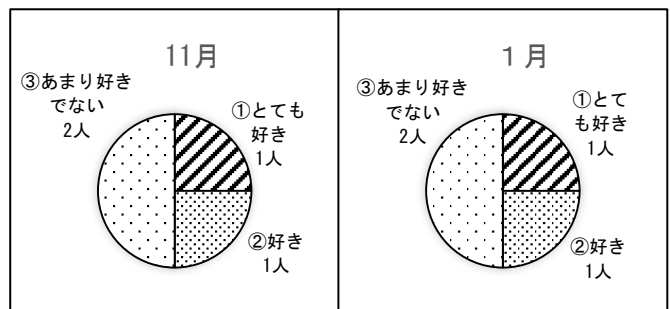


図6 自分の考えをみんなの前で伝えたり、話したりする事は好きですか

表2 交流学級担任へのアンケート項

アンケート項目	
①	朝からきちんと学習できていますか
②	交流学級で特に頑張っているものはどれですか
③	交流学級では、友達の発表や考えを聞くことは好きですか
④	交流学級内では、自分の考えを発表する機会がありますか
⑤	作文または絵作文など自分の感想を書くことはできていますか
⑥	特別支援学級の児童は、交流学級での話し合い活動などで苦手なことや困ったことがあるとどうしていますか
⑦	話し合い活動に参加していない場合、先生はどうしていますか
⑧	みんなに認められたり褒められたりする場面はありますか



図7 アニメーションを取り入れた授業実践

課題を提示した（図 7）。その結果、児童は意欲的に学習活動に取り組むことができ、内容を理解することができた。また、意見交流の場では、挿絵から分かることを説明する児童や、友だちの発表に付け加えて発表する児童の姿も見られた。作戦「前かな？後ろかな？」では、お互いの考えを出し合いながら、要約文を並べ替えていった。並び替えた順番を確かめる際には、教科書に戻り、訂正や並び替えを児童自身で取り組むことができるようになった。

自立活動では、ソーシャルスキルを取り入れる事で、その場に応じた対応の仕方等を積極的に取り組むことができた。また、これまでは一人一人がそれぞれの考えを述べるにとどまりがちだった意見交流の場も、SSTを計画的に行うことで、個別、ペア、学級全体で考える事を通して、友だちの考えを積極的に聞けるようになってきた。

以上の事より、国語や自立活動の取り組みを通して、言語活動が活発になり、コミュニケーション能力が育ったと考える。

(2) 研究仮説②

意見交流の場において、自分の考えをまとめたワークシートをもとに、自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたり比較することで、言語活動が活発になりコミュニケーション能力が育つであろう

自立活動の時間では、ワークシートの書き方やルールが分かってくると、自分の意見を書くことができるようになった。また、自分の考えを記入したワークシートを手がかりに、できるだけ多くの人と意見交流する事で、同じ意見や違った意見も聞く事ができるようになった。自分の考えがみんなに認められる事で、ワークシートやノートに書いた自分の考えに自信が持て、「次も頑張るぞ」という意欲につながったと考える。

合同授業では、意見交流の場面において、全く書けていない児童に声をかけてあげたり、自分の考えを聞かせ、ヒントを出してあげる児童の姿も見られた。また、6年生や5年生の先輩と交流する事で、話し方の話型を真似したり、自分と違った意見を聞けるようになってきた。このことから、意見交流の場において、自分の考えをまとめたワークシートをもとに、自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたり比較することで、言語活動が活発になりコミュニケーション能力が育ったと考える。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) アンケートや認知能力検査から児童の実態を把握し、この実態をもとにアニメーションやSSTを取り入れた授業改善を行い授業実践する事ができた。
- (2) ワークシートに自分の考えをまとめる時間や、意見交流する場をできるだけ多く設定する事で、言語活動が活発になり、児童が主体的に学習に取り組む事ができるようになった。

2 課題

- (1) 交流学級では、支援学級とは違い、素直に自分の意見や考えを積極的発言できていないので、交流学級においても、自分の意見や考えを積極的に発言できるよう、交流学級担任と連携し、継続して支援していく。
- (2) SSTを通して、「その場に応じた言葉遣い」、「学級・学校でのルールやマナー」、「相手の立場を考えて行動する」等、学習してきた事を今後は様々な場面で一人でも適切に対応できるよう継続して取り組む。

〈参考文献〉

- 西岡有香 2018 『気持ちを理解するためのスキルアップワーク』 明治図書
- 文部科学省 2018 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編』 東洋館出版社
- 文部科学省 2018 『特別支援学校教育要領・学習指導要領自立活動編』 開隆堂
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領国語編』 東洋館出版社
- 文部科学省 2017 『小学校学習指導要領総則編』 東洋館出版社
- コロロ発達療育センター 2017 『ことばを育てるワークシート』 合同出版
- 上野一彦 2014 『特別支援教育をサポートするSST 実践教材集』 ナツメ社
- 西岡有香 2012 『友達と仲良くするためのスキルアップワーク』 明治図書
- 文部科学省 2011 『言語活動の充実に関する指導事例集 ～思考力, 判断力, 表現力の育成に向けて～【小学校版】』 教育出版株式会社
- 大森修 2009 『グレーゾーンの子どもに対応したソーシャルコミュニケーションづくり』 明治図書
- 岩辺泰史 2003 『はじめてのアニメーション 一冊の本が宝島』 柏書房
- M・Mサルト 2001
- 『読書へのアニメーション 75の作戦』 柏書房
- 岩辺泰史 1999 『ぼくらは物語探偵団・まなび わくわく アニメーション』 柏書房

〈参考 WEB サイト〉

- 関根廣志 2016 『学び合いの基本について』 2016(最終閲覧 2019 年 12 月)
https://jasce.jp/docs/jasce_sekine_04.pdf
- 文部科学省 コミュニケーション推進会議 2011 年
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/commu/1294421.htm
- 文部科学省 特別支援教育の推進について(通知) 2007 年 4 月 1 日(最終閲覧 2019 年 12 月)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1300904.htm